

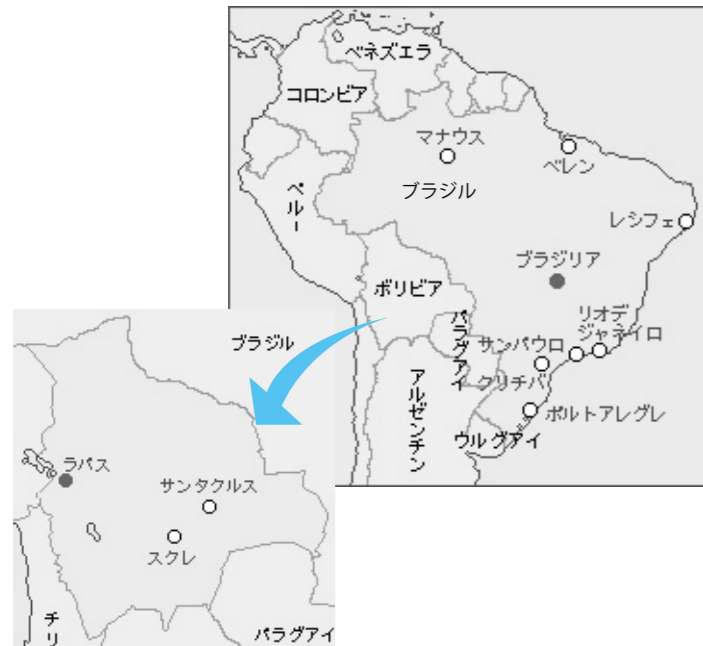
わーるど

特別号
2015.8.1

世界で活躍するわが町の人々

☆シニアボランティアとして高齢者福祉に貢献 — 杉本和恵さん

☆青年海外協力隊としてカメルーンで活動中 — 丸尾大輔さん



杉本和恵さん

介護福祉士として勤務した後、国際ボランティアを目指してアメリカへ。その後 JICA (シニアボランティア) で南米へ3回派遣される。

- 2001年～2003年 ブラジル・サンパウロ
- 2004年～2006年 ブラジル・ベレン
- 2009年～2011年 ボリビア・サンファン
- ・サンファンは、コロニア・オキナワとともにサンタクルス郊外にある日系移民の居住地。

19年前(※)の阪神淡路大震災でのボランティア活動終了後に、以前から関心がありました障害者や高齢者に優しく、社会福祉や環境問題の意識が高い全米でも有名な街、カルフォルニア州のバークレーに高齢者福祉を学ぶ為に自

私が2001年から国際ボランティアに挑戦しました動機と活動体験をお話します。

国際ボランティアへの挑戦と感動

国際交流協会では、海外で活躍された稲美町に縁のある方々をご紹介します。二回目の今回は、南米でシニアボランティアとして、高齢者福祉に貢献された杉本和恵さんと、現在青年海外協力隊としてカメルーンに赴任中の丸尾大輔さんです。

ら行動を開始しました。研修先のバークレーのホスピスでは、国籍・職業・宗教・年齢・人種に関係無く、大勢のボランティアの人々が自らの意思で、責任と誇りを持って生き生きと輝いて活動する姿に日々感動しました。特に、私の指導者の国連ボランティアの女性との出会いは大変衝撃的で大切な時間でした。命と向き合うホスピスの現場で「寄り添う介護」や「命の尊さ」そして海外での活動で最も重要な「目的意識」、「異文化と向き合う勇氣」、「相互扶助の精神」等多くを学びました。彼女の言動や魅力的な生き方を目の当たりにして、私の人生観が大きく変わりました。バークレーでの多くの学びと感動が国際ボランティアへの動機となり私の原動力となったのです。

2001年55歳の時、長年好奇心と夢を持ち続けた国際ボランティアに勇気を出して初めての挑戦で JICA のシニアボランティアとしてブラジルへの派遣が決定し、2001年7月に最初の赴任となりました。現地での要請活動は、巡回診療の医師団との同行や、高齢者福祉事業と地域福祉事業に関連する業務指導と現地の施設職員の人材育成が主な私の仕事

①奇跡の11日間
カメルーンでの体験

本当に奇跡でした。最初の何日間かは甘く見ていたのですが、そう停電です。11日間連続。インフラで唯一あつた電気すらなくなりました。日本では想像できないと思います。着任地では度々停電が起きます。最長で11日間続きました。最初は「またか」と余裕ぶっていたのですが、3日目ぐらいいから怖くなってきました。もう、パソコンも携帯も充電できません。持ってきたライトも極力使わないようにしました。冷蔵庫はただの物置に成り果てました。昼は良いが夜が来るのがあんなに恐ろしいとは思いませんでした。部屋の中にいるより月明かりの外の方が明るいので、外で周りの住人たちと話して時間を潰しました。夜がものすごく長い。目を開けても閉じても同じ。光が一切ない深遠。毎朝起きた時にするのは電気が来ないかの確認でした。しかし、慣れるもので五日目ぐらいいからは電気がないので普通になりました。明かりがないので16時過ぎぐらいいから食事の

準備を始めるようになり、夜何もせずに横になり、眠たくなるのを待つという生活にも慣れました。「悟り？」と思いつめていた11日目の午後。安定器の作動する「カチツ」の音が。安定器が作動している。夢じゃない！すべてが何故か愛おしくなりました。そして周りから歓声が一つ、何とかその日は久しぶりに電気がある生活を楽しみました。

カメルーンの首都ヤウンデにはボランティア連絡所といって、私たち協力隊員が着任地から私用、もしくは業務で来た際に宿泊できる場所があります。さらに、JICAカメルーン事務所もヤウンデにあるため、ヤウンデには必然的に何度かは訪れることとなります。日本から言えばいわゆる「発展途上国」のカメルーン。街は正直不衛生なところも多く、ゴミが捨ててあったり、道が壊れていたり、車は我先にと二車線のところを3列で走っていたり。なかなかファンキーです。今では慣れましたがやっぱり最初は「えーっ!?」って思ったこともあります。例えば、靴や服を普通に道でポンと置いて売っていること。さらに、タクシードも独特です。ヤウンデの移動は基本、徒歩かタクシーです。ただ、タクシーはすべて値段交渉プラス乗り合いです。道から運転手に場所名と金額を大声で告げ、OKなら乗車できるといわけです。カ



近所の子どもたち

メルーンはアンバランスな国というか、現在急成長しているのです。いい所は多いです。フランスの会社のスーパーなども存在します。ヒルトンホテルや銀行、イタリアンレストランもあり、「ここカメルーン!?」と思うくらい綺麗です。ただしすべての場所が綺麗というわけではなくその部分だけが別空間になっている感じです。ヤウンデでも壁に穴が空いている家に住んでいる人もいます。そのすぐ横に豪邸に住んでいる人もいます。貧富の差というのを感じざるを得ないです。

・第1回目は「わーるど」6月1日付通常版「わーるど」に掲載しています。

・続きは、今後発行の「わーるど」およびHPでご覧ください。



子どもたちの仕事



住んでいる家



ボリビアでの活動



杉本さん考案
リズム体操



介護予防事業

- ・要支援・要介護高齢者の巡回訪問
- ・認知症や個別の自立支援のリハビリ・介護指導
- ・デイサービス・パワーリハビリテーション
ゲートボール・パークゴルフ・ふれあいサロン開設
健康づくり教室・介護予防教室

高齢者福祉事業

- ・医療・保健・福祉の連携（診療所職員研修）
- ・敬老会や他の高齢者主体の行事の企画・実施
- ・ボランティア人材育成
（シルバー・地域福祉・三地区リーダー養成研修）
- ・福祉検討委員会・福祉センター建設委員会の企画・助言



パワーリハビリ
ゴムベルトで下肢強化



三地区福祉フェスティバル
（コロニア・オキナワにて）



健康づくり教室
ベンチサッカー



ファッションショー
（敬老会）

カメルーンってどんな国
私の着任地であるエコアジジョンは僻地であり、ただただジャングルです。協力隊員の中でも過酷と言われているアフリカ。その中でも過酷と言われるカメルーン。そのカメルーン内でも一番過酷な任地と言われている。電気以外のインフラ設備は整っていません。つまり私の住居にはインターネットはもちろん、排水施設、水道は無く、食材も限られたもの（ニンニク、玉ねぎ）しか購入できません。ポンプ井戸は存在しているので断水の心配はないです。人口は500人と言われています。住居は村長の



カメルーン通信
丸尾大輔

杉本和恵さん、ありがとうございました。
（※）2014年9月9日 稲美町役場にて取材

約10年間の活動を振り返り異文化に触れる事で、改めて日本の歴史や伝統文化や環境を見直すと同時に、海外で大勢の人々と出会って「人という大切な財産」と貴重な体験や有意義な時間を共有する事が出来ました。そして多くの感動と達成感を得る事が出来た事に心から感謝の気持ちで一杯です。



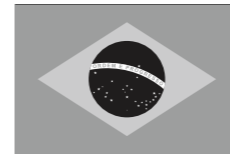
アフリカ大陸



丸尾大輔さん

青年海外協力隊として、2014年10月からカメルーンに赴任。

家の一角を間借りしている状態で家の周りには全員が村長の家族であり私も家族のように接してくれます。ジャングルでも何もありませんがそれでも小、中学校、高校はあります。また、カメルーンにいくとずっと「シノワ！」（フランス語で中国人）と言われる。それはここエコアジジョンでも変わりません。最近では減りましたが、それでも外



ブラジルでの活動

施設巡回指導

- ・健康体操とゲーム指導
- ・認知症施設での書道教室、音楽療法（孟宗竹を利用し、残存機能を活かす訓練）
- ・施設での介護技術指導（疑似体験、三角巾による応急処置）、移動介助・排泄介助指導など現地スタッフの人材育成
- ・疑似体験の例：錘やサポーターを装着し、職員が障害者の身体的・心理的变化を学ぶ

奥地巡回診療

ベレンというアマゾンの中にある町に木の船で9時間～12時間かけて行き、地域の方に「介護相談や生き甲斐づくり」についての啓蒙活動

在宅高齢者巡回指導

- ・在宅で介護をしている家族に対して、介護指導



（健康体操とゲーム指導）

初めての四施設合同運動会

- ・パン食い競争車椅子の部
- ・パン食い競争歩行者の部（競技に出るために、毎日歩行訓練に励んだ）
- ・借り物競争車椅子の部
- ・紅白玉入れ ・仮装行列 ・炭坑節 など



（パン食い競争）

忘れられない貴重な体験

私は本来の要請活動以外にも、現地の様々な福祉活動に積極的に参加しました。活動の一部ですが、公的支援が殆ど無い社会の片隅に追いやられた人達の生活支援です。それは、ストリートチルドレンやHIV・エイズ患者の孤児達の見守りと生活支援活動です。貧困地域では親を失った子どもたちが過酷な状況で、麻薬や覚せい剤など非行へ走る現実、目を背けず、愛情を持って根気よく接する事で、徐々に自立に向かつて意欲と笑顔の表情が見えた時は、子供たちを抱きしめ何度も褒めてお互いに一歩前進した勇気に喜び合いました。

次にハンセン病施設での活動は、今なおハンセン病に対する社会の間違った偏見と差別、更に、想像を絶する悲惨な数々の人権侵害を受けた高齢者の方々のお話を傾聴する度に、私は、ただ寄り添い手を握り締めるだけで涙が止まらず胸が張り裂けそうになりました。人間の尊厳や自由や平等など、同情的傍観では何も変わらない事をこの時痛感しました。海外での福祉の現状を多くの人々に伝えて行く事が私の役割だと強く心に思いました。

ボリビアで見た光景

海外で活動中に一番驚いたのは、2011年3月11日の東日本大震災の津波報道でした。当時ボリビアで活動中の私は、日本から刻々と報道される被災地の悲惨な状況を見て、全身が震えて居た堪れない気持ちとなり、今私の出来る事は何かと考え早速行動に移しました。現地の人達に義援金と応援メッセージのお願いに奔走したところ、若者から高齢者まで、大勢のボリビアの人達が快く協力して下さいました。感謝の気持ちで涙が溢れました。2011年7月ボリビアでの活動を終了し帰国した私は、早速被災地岩手県に駆け付けて、ボリビアの人達の心温かい義援金と復興への願いを届けて絆が深まりました。その後も私は、被災地岩手県で国際ボランティアの人達と支援活動に何度も参加しました。今後は被災地の復興を見守り続けたいと思います。

天皇・皇后両陛下御接見

最後に、2012年3月宮内庁と関係機関より「天皇・皇后両陛下御接見」のご連絡頂きました。2012年8月2日御所の特別室に於いて「天皇・皇后両陛下御接見」の機会を賜りました。私は、ボリビア国の代表として活動の資料等を「天皇・皇后両陛下」へ直接お渡しして、両陛下から直々に、海外でのボランティア活動に関して、ご質問と心温まる労いのお言葉を掛けて頂きました時は、緊張で身が引き締まると同時に、身に余る光栄で生涯忘れられない思い出となりました。